

9 月に入ると通常は雨季が始まります。今年は 8 月に雨季のような気候が続きました。むしろ 9 月には晴れた日が続いています。その一方で、北部の国境付近では大雨が降るなど、やはり昨今の気候の変動は注意を要します。

9 月に入り様々な行事が行われ忙しい月となりました。

1. カンパラ市交通管制改善計画(無償資金協力) 交通管制センターの完成

2025 年 1 月のコラムでカンパラ市内の立体交差道路(フライオーバー)が完成したことをお知らせしました。同時に日本は信号機を始めとするカンパラ市内の交通管制も支援してきました。9 月 3 日その中核である交通管制センターが完成、お披露目を行いました。これまでカンパラ市内では信号機のある交差点はわずかしがなく交通警察官による交通整理に頼っていました。これでは増大する交通量に対応する事は困難です。今回日本でも広く導入されている交通管制システムをカンパラ市内に導入することができました。交通状況を見ながら信号が調整されよりスムーズな車の流れを確保するものです。

完成式では交通安全のキャンペーンに取り組む子供たち、エコの観点から自転車の使用を広めようとする市民団体なども参加。急速な経済発展を遂げる中で同時により環境に優しい安全な街づくりに取り組む事は正しく待ったなしの課題です。一般市民の理解が不可欠である事は言うまでもありません。

今回の交通管制センターのお披露目が広く一般市民の方々の意識改革にも役立つことを願っています。



[開所式]



[管制パネルの前で]

2. TICAD CUP 2025

2024 年 9 月のコラムでも紹介させていただいた「TICAD CUP」が今年も開催されました。今年で 4 回目になります。過去最多の 8 チームが参加。選手はすべて女性

です。難民居住区から5チーム、開催地のジンジャから3チームが参加しました。難民居住区では昨年から地区ごとにサッカーのイベントを開催してきました。今回の5チームは各居住区の大会で優勝した居住区の代表チームです。

昨年と同じく、国連機関（UNHCR、UN WOMAN）、ウガンダ政府、地元ジンジャの自治体の代表も応援、観戦に駆けつけました。ウガンダには今や200万人もの難民が暮らしていると言われます。ウガンダ政府代表はウガンダの「オープンドア・ポリシー」（周辺地域からの難民を積極的に受け入れるという政策）は不変であると力強く宣言。TICAD CUPはウガンダにおける難民の問題に対する関心を呼び起こし女性のエンパワーメントに役立てるといった目的があります。厳しい現実にも直面しながらも将来への希望を育むイベントになりました。

優勝は昨年に引き続き地元ジンジャのチームでした。



〔試合の様子〕



〔開会式〕

3. アフリカで活躍する日本の医療機器

TICAD CUP でジンジャを訪れた際チャビルワ外科センター(Kyabirwa Surgical Centre; KSC)というジンジャの地域中核病院を訪問しました。ここは6月号のコラムで紹介しましたオリンパスの医療機器が設置されているところです。もともとは地元のNPOが設立した地域医療施設が発展したものです。米国ニューヨークのマウントサイナイ病院等の支援により本格的な設備を備えるようになりました。オリンパスの内視鏡タワー、スコープが多く活用されていました。内視鏡のハンズオントレーニングが実施されています。

大きな都市であるジンジャの郊外ですが病院の周囲はのどかな農村です。決して豊かな地域ではありません。病院施設の設置にあたっては、地元住民の理解や支援が不可欠です。周到的準備を行いこのような医療施設が開設されました。患者さんは地元の方が中心で、ニューヨークの病院とオンラインでつなぎ、地元の医師が施術するにあたって、同時並行で指導を受けながら治療が進んでいきます。原則として入院は行わず、日帰りで患者さんは自宅に戻ります。IT医療技術の発達により、アフリカの遠隔の地でもこのような医療が実際に行われていることに正直驚きを感じました。そ

ここで活躍する日本製の医療機材についても世界のマーケットは大きいと思います。アフリカで先進的な医療を必要とする人たちの期待も大きくなると思います。



[日本の医療機器を活用した診療室]



[病院の様子]

4. RICCI EVERYDAY 縫製工場訪問

カンパラでウガンダの女性を雇用し支援するバッグ工房を立ち上げた社会企業家・仲本千津さんの会社 RICCI EVERYDAY については 2024 年 6 月のコラムで紹介しました。今月仲本さんがウガンダに戻られた機会に初めて工房を訪問しました。

カンパラ市内はこんもりした丘が多くあります。仲本さんの工房はそのような丘のひとつを少し上がったところにあります。決して大きな規模ではありません。普通の家屋を改造して工房になっています。工房内には買い付けられた色鮮やかなアフリカプリントが積み上げられています。縫製用のマシンが数台無駄のない空間に置かれて皆さん忙しく作業をしていました。日本の百貨店で販売されるレベルのバッグが次々と作成されていました。10 名余りの女性が働いていましたが、どの方も目の輝き方が違うので非常に驚きました。

ウガンダでは特に若者の職を探すのは難しいです。東アフリカでトップレベルのマケレレ大学を出てもなかなか良い仕事は見つかりません。ましてやシングルマザーなど

困難を抱えた女性の生計維持は容易ではありません。日本のマーケットに輸出できるレベルの製品を生み出す工房で働く事は、非常な努力と実力を伴う必要があります。もちろんウガンダにも生き生きと働く若者の姿を見ることができます。しかし、RICCI EVERYDAY の工房の皆さんの熱量には強い印象を受けました。

唯一の後悔は工房に住んでいたヒメという犬が先日息を引き取ったことです。残念ながら筆者は元気な姿を見ることができませんでした。ウガンダでペットを飼う人はそれほど多くはありません。その分ペットは大切にされ、番犬などで活躍している犬も多いです。ヒメの冥福を祈りたいと思います。



[工房の様子]



[仲本さんと工房の入り口にて]

(以上)